

牧草夏枯れ期を克服する

第一回放牧での採食状況 ①



スイートソルゴの栽培と放牧利用

栃木県畜産試験場 技師 阿久津 国 男

概ね、前者が出穂前期の放牧で、後者が出穂後期の放牧とみるべきであり、生育程度は第二表のとおりであった。

(2) 放牧の方法

放牧方法は、まず圃場の周囲を電牧で囲み、五頭の去勢和牛（体重二二五～二四〇キ）を午前午後の二回に行ない、各回二～二時間半程度放牧した。

採食量は体重の一〇～一五％程度を目安にして牛が採食行動をやめ、歩行、排糞尿を行なうようになったとき、放牧を取りやめることにした。

この方法で実際に放牧を行なってみると、同牧区内では、牛も採食が容易であるためか、最初のころは放牧時間も短時間でよかったが、最終日が近くなってくるころ、踏み倒しもひどくなり、放牧時間も長時間を要するようになってきた。もっとも、これらのことは、牧草タイプでも同じ傾向を示している。

(3) 収量と採食量

生産量については放牧前に坪刈りを行なって、その生産量を推定し、採食量については体重法によってその量の推定を行なった。

結果は第二図のとおりであり、アール当たりに換算で出穂始期を例にとりて考察すると、二回の放牧利用を行なったが、その時の生産量は七三七キ（一坪当たり）であり、そのうち牛の腹の中に入った分量は四九五キであると推定される。

利用率でみると、出穂前期の放牧区が六七・二％、出穂後期放牧区が六九・四％と同

じような比率でありだいたい七〇％弱といふところである。

この数字は牧草地への放牧利用での利率に比べ低いものではないし、また、トウモロコシなどの、刈取給与方式に比べての利用率（食下量／投草量×一〇〇）からみても、低い数字ではなかった。残食部のほとんどは、写真①のごとく木質化した茎の部分の主であって、一旦踏みつけられた茎葉

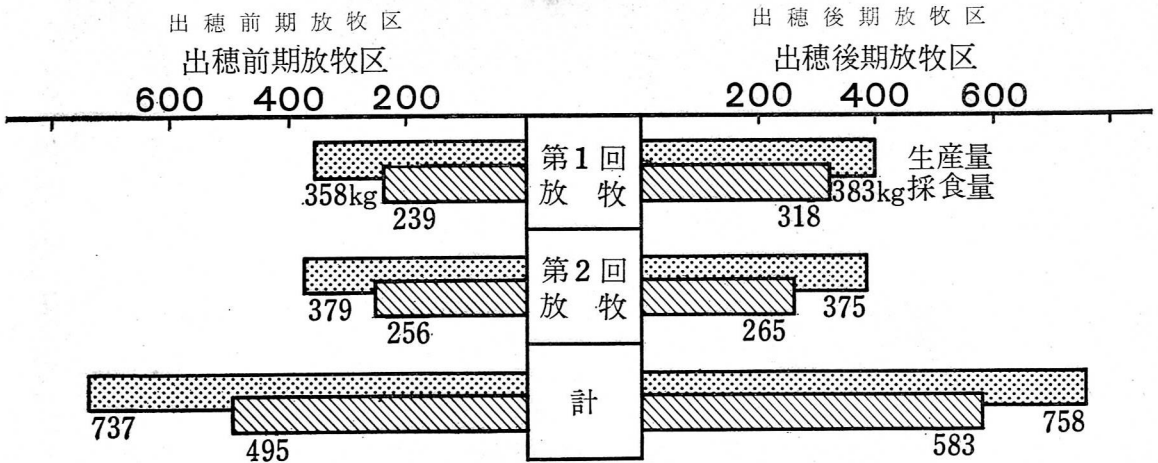
第2表 放牧時の生育調査

区 分	第 1 回 放 牧			第 2 回 放 牧		
	草 丈	葉 数	茎 数	草 丈	葉 数	茎 数
出 穂 前 期 区	161	7.0	4.7	176	7.1	9.8
出 穂 後 期 区	212	7.9	4.8	223	7.7	11.2

つきに一日一頭当たりの採食量でみると、第一回放牧では、出穂前、出穂後の両区共体重の一～一二％であり、これを実量でみると二五～二七キ程度と推定される。

第二回放牧でもこの数字に近く、このことから、若令肥育牛にあっては、一日四～五時間程度の放牧によって、体重の一～一二％程度の採

第2図 収量と採食量(1アール当り)



食量が見込まれた。
本来なら、このあともう一度放牧利用が可能であるが、あと作の関係で九月上中旬で打切ってしまった。

まとめ

盛夏期におけるスイートソルゴー畑への放牧利用は省力的効果また



第一回放牧終了後の状況 ②

は、その生産量と利用率からみて、一応の成果が挙げ得たものと思われる。本技術の応用は、牧草の夏枯れ期に対処して、牧草地内の一部にスイートソルゴーを作付し、枯死寸前の草地に一時休養を与え、草生の回復を待って、秋に再び放牧を行なうという利用方式からしても、極めて合理的であった。



放牧後十日目の再生状況 ③

なお、駄足ではあるが、私共の試験では、この跡地をデスキング(粗耕)して、イタリアンライグラスを播種し、晩秋(年内利用で十一月上(下旬)と翌年の早春(三月下旬(四月上旬))にかけて、放牧し放牧期間の延長を図っている。

(栃木県畜産試験場 飼料部)